

■企画背景

「現代神道論」、「大重潤一郎監督作品連続上映会」に続くユース企画です。当企画では、ユースメンバーを中心に企画運営を行い、東京自由大学に新しい参加者を引き込んでいくことを狙っております。従来の参加者の方々に加え、若い世代で現代社会の問題に関心をもつ人たちに参加してもらうことで、世代をまたいだ活発な議論の場を形成していくことを目指しています。今後の東京自由大学の新しい潮流をつくる一助になればと思っております。

■企画主旨

現在日本で進行している少子高齢化は、日本社会を大きく変えていきます。世界でもっとも速いスピードで進んでいく高齢化と福祉のコストの大幅な増加、2060年までに半減する労働人口と日本経済の縮小は社会に大きな変化をもたらします。少子化による子供の減少は社会の活力を低下させ、女性に対しても社会進出を拒むような現行制度の中で、日本ではますます先行世代を支えることが難しくなります。総人口の減少により内需は縮小し、日本の国力と国際的な地位を低下させます。この人口減少社会という人類未踏の社会に世界で最初に向き合うのが日本なのです。

しかし、この大きな変化に対して十分な対策はとられておらず、政治、経済、個人の価値観は旧来の枠組みにとらわれたままです。一方でこのテーマは世界に先駆けた先進的なテーマであり、世界中が日本の動向に注目しています。当企画が日本のこれからをつくりあげる大きな一歩になる事と期待しております。

■企画全体構成

当企画は四部構成となっています。少子高齢社会という大きなテーマを、医療、家族、経済、福祉の四分野にわけ、全講演会に参加することで少子高齢化していく日本の未来像について包括的な視点名をもって考察できるようになっています。講演をお願いした講師陣は次の通りです。第1回目「末路高齢社会と生存の転換」(講師:長谷川敏彦(日本医科大学教授))、第2回「少子化社会の家族観」(講師:山田昌弘(中央大学文学部教授))、第3回「人口減少と日本経済の進路」(講師:藻谷浩介(日本総合研究所調査部主席研究員))、第4回「創造的な福祉社会に向けて」(講師:広井良典(千葉大学法経学部総合政策学科教授))

■講演会第1回目の様子

長谷川敏彦氏をお招きし、少子高齢化社会の全体像についてお話しいただきました。長谷川先生の講演は、医療業界にとどまらず、人類の文明史的な視点から考察したもので、第一回を飾るのにふさわしい内容でした。

今後日本は、生殖年齢を過ぎた人口が全人口の過半数を占めるような「末路高齢社会」に突入します。こうした社会変化によって、個人の生き方・家族・経済・医療・福祉はどのような影響を受けていくのか、その中で私たちにはどういった選択肢があるのかについてお話しいただきました。統計データや医療・福祉の決まった観点でしか述べられない今後の日本の在り方を、「生存転換」という観点から見事なストーリーでご説明頂き、「末路高齢化社会」の大きな見取り図を頭に描くことができました。20年後には人口の2/3が50歳を超え、1/3が70歳を超えるこれからの社会の姿に、参加者の多くは自分たちが直面している変化の大きさに衝撃を受けていたように思います。

グループディスカッションも実施し、上は70代の方から、20代前半の社会人・大学生と世代を超えた意見交換も行い、「私はどう生きるのか」「社会はどう変わるべきか」について議論を行いました。団塊の世代の仕事の引継ぎや年金の金額



講師：長谷川 敏彦教授
(日本医科大学)

会員総会報告

井上 喜行 (事務局長)

平成24年度会員総会は6月23日に東京自由大学事務所に於いて開催されました。23年度事業報告、決算報告、24年度事業計画、予算計画が承認され、理事の再任が承認されました。また、宮山 多可志、加藤 之晴、海野 直宏、日渡 健介、辻 信行の5氏が新理事に就任しました。

事務局だより

渡辺 恵実 (事務局員)

今年に入り、パソコン、プロジェクターを購入しました。又、加藤之晴さんからスピーカーを、進士多佳子さんより大きなスクリーンを寄贈いただきました。

●http://homepage2.nifty.com/jiyudaigaku/ ●E-mail: jiyudaigaku@nifty.com

Newsletter Vol.19

2012年(平成24年)10月9日発行

編集・発行 NPO法人東京自由大学 / 事務局 〒101-0035 千代田区神田紺屋町5 T.Mビル2F TEL&FAX: 03-3253-9870
デザイン (有)アンビエンス / 印刷 (株)ベクトル

の話など、新聞・TVで一般に報道されているレベルの議論を越えた、個々人が現実感をもって想像できるリアルな話題が展開され、一人一人が社会の変化に向き合い、新しい生き方を他者と創って行かなければならないということが共有されたと思います。

■講演会第2回目の様子

山田昌弘氏をお招きし、少子化の主な原因としての未婚化と、その解決策についてお話しいただきました。わたしたちは、高度成長期に生まれた「夫は仕事、妻は家事」という生き方・考え方を、未だに引きずっています。しかし、若年男性の雇用は不安定で経済的に明るい見通しを立てにくくなっており、そのため結婚相手が見つかるまで親元で待つパラサイトシングルが増え、その結果活発な男女交際が妨げられています。個人は共働きを前提とした人生設計をし、政府は女性の正規雇用を促すような雇用制度改革を整えることで、夫婦が支え合い家族を営んでいく新しい社会が作られていくであろうというお話でした。

第2回目も異なる世代間でのグループディスカッションを実施し、「自分の将来設計の中で、結婚をどう位置づけるか」「家族をつくるとしたらどういった価値観を大切にするか?」という設問を軸に意見交換を行いました。身近なテーマであった事もあり、ディスカッションは大変盛り上がりました。やはり経済的背景の違いによるところが大きいのか、若手からは「今はやりたいことがあるから結婚はまだできない」といった意見が出る中で、年配の方からは「自由なことをみんながやっていた時代に出産・子育てをしたため、地域の友人や夫から助けを得ることができた」といった意見の違いが見られました。慎重に将来を考える未婚の若者と自らの経験を振り返る既婚の年配者の対比が印象的でした。

■最後に

当企画を運営・実施するにあたり、自由大学運営メンバーの方々から温かいご支援・ご協力を頂いております。新しい風を自由大学に吹き込むことを目標にまい進してまいりますので、今後ともよろしく願いいたします。



講師：山田 昌弘教授
(中央大学)

EVENTS

○三省祭り2012

「言霊巡礼〜ことば、いのち、自己への旅」のお知らせ

今年の三省祭りは、1973年暮れから1974年暮れにかけての一年に及ぶインド、ネパールの聖地巡礼を経て、天命にしたがって聖老人・縄文杉の島を永住の地とした山尾三省氏の言葉と精神の旅を探究します。三省氏の古くからの友人で、インドの旅の先達でもある写真家・渡辺眸さんと、群島の文化人類学を詩のように語る今福龍太氏を迎えます。渡辺眸写真展「三省と屋久島」の展覧会(10月21日～当日まで・月曜休み)もあります。同封の告知はがきをごらんください。

■日 程：10月28日(日) ■会 場：NPO法人東京自由大学
■参加費：第1部 予約2,000円(定員70名)当日2,500円 第2部 1,500円(定員30名)
■第1部 13:00～16:30 [トークセッション] 今福龍太×渡辺眸×鎌田東二
■第2部 17:30～19:00 [即興演奏+ホエトリリーディング] 音楽/宇々地・野村雅美・KOW

○春合宿

2012年度最後の催しは春合宿です。那須と京都を交互に訪れる春合宿、今年は京都です。早春の京都の自然と文化を味わう合宿です。詳しい内容は現在企画検討中。御期待下さい。

■日 程：3月23日(土)～25日(月) 関西セミナーハウス泊



■編集後記

岡野 恵美子 (理事・副運営委員長)

鎮魂と祈りの旅であった夏合宿に参加された方々の心に染みいる感想をお届けします。「古事記1300年・鎌田東二の超『古事記』論」は、3回とも奔流の如くほとばしる熱気のことまった講義でした。今年度からスタートしたきら星のようなユース企画は、継続しつつ豊かに発展しています。後期に開催される「三省祭り2012 言霊巡礼」、大澤真幸ゼミ「現代社会論」も各種講座、ゼミ共々ご注目ください。



現代霊性学講座第二弾 ～連続シンポジウム～

古事記1300年

鎌田東二の超『古事記』論 報告

鳥飼 美和子 (担当・理事・運営委員長)

第1回 5月26日(土)「古事記ルネサンス」と「超古事記」 映画『光りの島』大重潤一郎監督作品を上映

第2回 6月30日(土)「怪物退治」と「うたの発生」 第3回 7月28日(土)「神々・動物・聖地・芸能」

●第1回会場：角川第2本社ビル(角川学芸出版)第2会議室 ●第2/第3回会場：東京自由大学

東京自由大学では、現代霊性学講座第一弾の仏教に続き、第二弾は日本の神々の世界に分け入ることとなった。現存する最古の神話伝承と歴史の書物「古事記」は712年に編纂され、今年がちょうど1300年、また、鴨長明が「方丈記」を著した1212年から800年でもある。この節目の年に、神神習合、神仏習合を日本の思想的根幹としてとらえてきた鎌田東二氏による超・古事記論が3回にわたって繰り広げられた。ポスト3・11、西暦2012年の日本において、神道や古事記の既存の理解を超える創造性に満ちた新たな視点が提示された。

第一回では、主に「古事記」の特性が「日本書紀」と対比させて明らかにされた。「古事記」は112もの歌謡を含むドラマであり、叙事詩であるが、その創作意図は一種のマニフェストとも言え、新しい。「日本書紀」は対外的に国家の正式文書となるものでデータベースとして新しい装いだが、多様で古い異伝承を多く記録している。

「古事記」マニフェストで宣言されるのは、高天原神学でありむすびの神学である。「日本書紀」には断片的にしか登場しない「むすび」の神が冒頭に二神登場し、次いでイザナギ、イザナミとなり、次いで出雲の神が天孫降臨するニニギノミコトに国譲りするという、二つのものの拮抗と統合が描かれている。それは天孫降臨という縦糸をしっかりと通し、出雲や様々な神々のドラマを横糸の彩りとして綴るという構図である。この時、同時上映された大重監督の『光りの島』は、無人島でひとり彷徨する男の自然のなかでのいのちの発見の物語であった。

第2回では、「古事記」で活躍するスサノヲの両義性を取り上げ、高天原から追放される前の乱暴狼藉する暴力神から、出雲に降り立ち、怪物(ヤマタノオロチ)を退治し、恋歌を詠み、英雄神に変身するあり方を考察した。文化英雄としてトリックスターの要素を持っていること、また剣と歌の力を発揮し外界・内界ともに修め鎮めることができることは重要な要素である。

その系譜に、オオクニヌシ、神武天皇、ヤマトタケル、仁徳天皇、雄略天皇などが該当する。そこには父にうとまれ放浪する戦士の要素もあり、鎮魂の物語が生まれる。また、メソポタミア神話のギルガメッシュ、ギリシア神話のペルセウスやヘラクレス、ヘブライ神話のモーゼやダビデ、ケルト神話のアーサー王などの共通点のみで、比較英雄神話論を展開した。

第3回目では、カミとはなにかを、「古事記」成立以前からある日本古来の感覚「磐根 樹根立 草の片葉も言問う」、「リンゴの気持ちはよくわかる」、「道路が泣いている」という感受性から、全ての威力あるモノが神となる(八百万の神)について確認した。自然、動物、人間全てが神になるアニミズム的感覚は、神仏習合、天台本覚思想へと繋がり、さらにラフカディオ・ハーンの著作や、遠藤周作の「深い河」、現代のアニメ(特に宮崎アニメ)などにも顕著に現れている。

「古事記」は戦士と詩人の恋物語と、天孫降臨の高天原統治政治(藤原氏が関与する天皇政治)のための神学との合体であること。冒頭の太安万侶による「序文」の雄弁で華麗な始まりに比して、末尾の推古天皇はあまりに貧弱な表記であること。ここに鎌田氏は隠された王子(聖徳太子)への鎮魂があるのではないかと推理した。聖徳太子はスサノヲ、オオクニヌシに通じる要素があるという。「古事記」「日本書紀」の編纂には藤原不比等が深くかわっており、その周辺には秦河勝もいて、藤原氏が関与する日本の神話作りがされていたのではないかと。その政治思想として天皇に繋がる神の流れをはっきりとさせながら、聖徳太子の国づくりも取り入れて統治システムを整えて行ったことが示された。

質疑応答でも、聖徳太子は実在したか?や「むすび」とはなにかなど活発でスリリングな内容となった。

鎌田氏は古事記1300年(方丈記800年)を未来へつなげるためには、生成する力、自然の大きいなるいのちの働きの感受が大切だとした。それは古事記では「むすび」といい、修理固成という。それは動乱期においては壊れるものと生れるものでもある。この節目の年に、日本が抱え持っているダブルスタンダードをいい意味で生かしていこう、神道的なものど仏教的なものを両方持っていること(ダブルスタンダード)とは、両手があることだ。組み合わせることで生れる力、結びの力はより大きくなるはず。その力で今の困難な状況から、新たな国づくりのステージへとつなげていくことが可能となるのではないかと。「古事記」を「未来記」として、むすびの力と聖徳太子が構想し

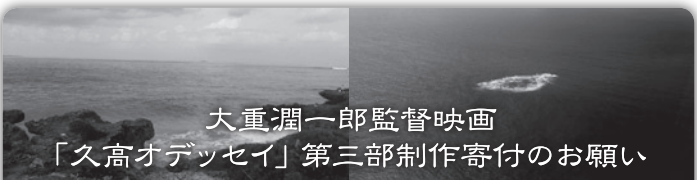
た仏教の力をダイナミックにつなげてゆくことが必要ではないかと提起した。ホラ貝が轟き、箆笛の音がたなびき、能管の音が空間を疾駆した超・古事記論。10歳から古事記に親しみ、古事記によって人生が変わったという鎌田氏の古事記語りは、スピード感にあふれ、縦横無尽に湧きだすように話が展開していった。

この講座をもととして、さらに大胆に筆を入れた『古事記ワンダーランド』が10月23日に出版される。ぜひご一読ください。(角川学芸出版刊 1,680円税別)

また、現代霊性学講座の第一弾『仏教は世界を救うか?』は、膨大なシンポジウムの記録であったため、出版までの行程に時間がかかった。お待ちいただいた方には申し訳ありませんでした。11月から年内には出版の予定。藤田一照氏、西川隆範氏、井上ウィマラ氏、鎌田東二氏にそれぞれ一稿書き下ろしていただいた。こちらでも期待ください。(地湧社刊)



「古事記ワンダーランド」
(鎌田東二著/角川学芸出版)



今、沖縄に来ています。NPO法人東京自由大学副理事長であり、NPO法人沖縄映像文化研究所理事長の大重潤一郎監督のところにいます。今日の朝まで、2日間、久高島に渡っていました。昨日は、兼島久高中学校長さん、先生方、生徒たち、糸数区長さん、内閣NPO法人久高島振興会理事長さん、久高島留学センター代表の坂本清治さん、琉球大学の地域こしサークル「ディスカバリー」の6名の学生たちと交流しました。久高島も激しく動いています。その波が次の世の力強いよりよき創造につながっていくことを心から望んでいます。

さて、大重映画は、1970年制作の「黒神」以来、一貫して、自然の中で、自然への畏怖畏敬を基に生きていく人間の姿を描き続けてきました。デビュー作「黒神」は42年の歳月を経ても、古びるどころか、この東日本大震災「3・11」後の世界において、より一層リアルに、かつ切実にその問いと探究が突き刺さってきます。大重作品のこのデビュー作は、大重映画の総集編といえる「久高オデッセイ」三部作と直結しています。このような乱世的な時代状況の中で、大重映画の持つ生の基層へのまなざしがより深く強く輝き出ると確信しています。

その大重監督の悲願である「久高オデッセイ」三部作の完成に向けて、NPO法人東京自由大学としても、可能なかぎりの支援と協力の形を取りたいと考えておりますが、第一部・第二部で実施したように、会員・非会員の皆様方に制作資金のご寄付をお願い申し上げます(振り込み先はお問い合わせください)。

NPO法人東京自由大学も次の世代にリレーしていくべく体制を整え、シフトし始めています。若い次世代(ユース)が育ちつつあります。大重映画「久高オデッセイ」三部作の完成は、そのような東京自由大学の仕事の第一期の完遂と連動し、伴走するものです。「久高オデッセイ第二部 生章」は、多くの方々のご協力を得ながら、わたしが制作担当しました。第三部も引き続き担当していきたいと思うので、今後ともご支援・ご協力のほどお願い申し上げます。

2012年9月20日 鎌田東二拝

2012年度夏合宿

東日本大震災被災地を巡る
鎮魂と再生への祈りの旅

2012年8月24日(金)～27日(月)

「薄れゆく『被災地感覚』」

辻 信行 (理事・会員)

わたしは被災地で生まれ、被災地で育った。しかし、わたしが生まれ育ったのは東北ではない。神奈川の横浜だ。

横浜は、関東大震災 (89年前)の被災地だ。さらには安政大地震 (157年前)の被災地であり、元禄大地震 (309年前)の被災地でもある。しかし、わたしたちは忘れている。被災の記憶を。日本中、あらゆる場所が被災地なのだという感覚を。

薄れゆく「被災地感覚」。今回の合宿を通して、わたしは人々の記憶から3・11が薄らいでゆく宿命を感じ取った。仙台市若林区の津波の跡地は、瓦礫を撤去した後の更地に雑草が生い茂り、「ここに津波が来た」と言われなければ、わたしには分からなかったことだろう。石巻市雄勝町の公民館の屋上からは、津波で流されたバスが撤去され、ただの廃墟が残されているだけだった。

被災地の人々にとって、震災の記憶を喚起させる遺物を残すのは、辛いことだ。しかし、わたしたちは「忘れる」という性を持っている。それはロボットにはない人間特有の長所であり、同時に短所なのだ。

気仙沼の地福寺で納骨堂を参拝したとき、わたしの背筋は凍りついた。3・11で亡くなった人々のお骨と遺影の上段から、軍服姿の青年たちの遺影が、凛々しい顔でこちらを見つめていた。20歳前後で戦火に散った彼らの眠る大海原に、3・11の大津波で流された彼らの元同級生・友人・恋人・家族・子孫たちも、沈潜していったのだ。太平洋の海底で、60数年ぶりに邂逅した彼ら彼女らは、いま何を想い、語らい、眼差しているのだろうか。激動の戦後を「生き残った者の罪悪感」と共に駆け抜けた人々が、今度の震災で多く命を落とした。しかしいま、彼らの家族や友人たちもまた、「生き残った者の罪悪感」と共に、3・11後を生きる。

そして、わたしも生き残った。3月11日の午後2時46分、14分後に外出を控え横浜の安全な自宅に身を置いていたから、生き残った。生き残った者として、わたしは震災の記憶から、新しい時代を創造するための智慧をすくい取らなくてはならないと考える。そのために、何か具体的な行動を起こさなければならないと、この合宿に参加して切に思った。

そこで来年度から、東京自由大学で震災関連講座を立ち上げ、今回の複雑極まりない震災を、多角的に、より大きな視点から考えてゆく機会を作りたいと思う。それが生き残ったわたしにできる、せめてものつとめだと思うのだ。

最後に、この合宿を企画の段階から当日の進行まで見事に取り仕切ってくださった、鳥飼美和子さん、岡野恵美子さん、被災地を何度も訪ねて今回の合宿の実現にこぎつけてくださった鎌田東二先生、現地で共に鎮魂の祈りを捧げた合宿参加者の皆さん、そして、東北の地で出会ったすべての皆様に、心から御礼申し上げます。合掌。

「被災地にできること、したいこと」 浜田 浩之 (会友)

私は、これまで東北と殆ど縁がなく、東北に行くようになったのは、去年の東日本大震災以降である。自分ができることをしたいと考え、鎌田先生の「東山修験道」の東北被災地のレポートにも刺激を受け、6月に福島・南相馬、宮城・石巻、岩手・釜石を災害ボランティアしながら回った。9・10月は、宮城・女川町で仮設住宅用の家具を制作するプロジェクトに参加した。

今回の夏合宿は、直前まで参加を迷った。その理由の一つに、これまでの自分の活動に対して、夏合宿は被災地を見て回り、話を聞くことが中心だったので、何もしないことに後ろめたさを感じたからである。しかし、行く機会のなかった、特に被害の大きい地域 (雄勝町、大槌町など) を実際に訪れ、接触のあまりなかった被災者の話を聞きたいと思った。また、私は、東京自由大学のユース企画に参加しているが、ユース企画からの合宿参加が少なかったため、自分が参加して、見聞を共有したいと考えた。ヘド口除去や瓦礫の撤去、物を作る活動に続き、「見ること、聞くこと」を今回の旅の個人的なテーマにした。

4日間の旅を通した被災地の印象は、瓦礫はどこもほぼ片付いていて、仮設の住宅や店舗は建っているものの、本格的な復興は停滞しているということ。そして時間の経過とともに、震災当時の痕跡が少なくなり、被災地への関心が薄れることを心配している人が多いことだった。岩手・陸前高田市・慈恩寺の古川住職の「とにかく被災地に来て欲しい。見たことを周りの人にも伝えて欲しい」という話、岩手・大槌町の仮設住宅で暮らす被災者の「(被災地を) 忘れないで下さい」という言葉、大槌町で傾聴ボランティアの活動をしている真宗大谷派の僧侶、吉田律子さんの話などをお聞きしていくうちに、自身の思い込みや先入観による後ろめたさは解消していった。

現地では、ボランティアについて、肯定的な評価や厳しい意見を聞き、被災地でどう見られているかを知ることができた。また、被災地の方の話に加え、合宿に参加した方たちと被災地との関わり方の話も興味深かった。関東だけでなく、関西、中国、四国など、東北から離れている方も真剣に震災と向き合っていることを知った。

夏合宿から帰って2週間が過ぎ、東北から離れた東京圏から振り返ると、つい他人事のような書き方になる。私が学ぶ大学の通信教育の「東北地域学」という科目に、去年の東北の見聞をレポートとして提出したことがある。その中で、「傍観者の的な姿勢では本質的なことは何も学べないと私は思います。自分の問題としてどう受け止めるか (中略正恒先生)」『あなたの書いたレポートを、実際に被災地におられる方々に読んでもらえるか、彼らの心に何かを与えることが出来るか、少し考えてみて下さい。(橋本章先生)』と指摘された。

今後も、機会のあるごとに、被災地を実際に訪れ、被災者の話を聞き、それを周りの人にも伝えていきたい。

「荒神社宮司における物語と鎮魂」 高見 友理 (一般)

東北の鎮魂の旅を終えて、荒神社宮司のお話が一番印象に残った。それはまるで遠野物語の一編かと思われる様な美しい物語であった。

津波がひいて、ひとり神社を見に行った宮司は変わり果てた社を前に、84年間生きてきて初めて腰を抜かしたという。みぞれ降る中、立つことも叶わず数時間。ふうっとお化粧の匂いがして、気がついた。見れば若い女性が自分に傘を差し掛けてくれていた。後に、それは新聞社の女性記者であったことを知る。「あの時、あの女性があの場所に来なかったならば、私は凍死していたでしょう。あの女性に巡り会ったのも、神様の思し召し。」

想像を絶する喪失の時空間から宮司を連れ出したのは、この世における女性記者であるが、また別の次元では、人間の生を奪いもし、与えもする女神の示現そのもののように思われた。

雄勝法印神楽の復興を支援された岡野玲子氏の作品「陰陽師」第10巻では、内裏の大火という大きな喪失が描かれている。主人公安倍晴明に対して、友である源博雅が自らの体験をふり返る場面がある。「実はよ おれが一番死にそうだったのは炎の中にいるときではなくてな 燃えつきた内裏の灰燼の中に立っていた時だよ 失ってしまったものが大きすぎて とりもどせるのかもわからず呆然と立ちつくして その時 おぬしがおれをそこから連れ出してくれた」このような語りは、喪失体験を相対化できるほどに魂が再生しているからこそ可能となる。晴明は思考する。「そうなのだ……たったひとりでもよいのだ……博雅ひとりでも炎上の恐怖や巨大な喪失から解放されれば……内裏の中の緊張が……解けてゆくのだ」後に、笛の名手である博雅はその笛の音で帝の魂をも再生し得たのだった。

被災した宮司の家を“仮設では神社の仕事はできないでしょう”として地域の人々が再建してくれたという。大きな喪失を体験してもなお、爾々と神ごとに仕えている宮司の存在が、いかに地域の人々の精神的な支柱となっていることか。ここに深く敬意を表する。

どのような物語を根拠として、今日、自分は生きているのか。日常の因果関係を越えた次元での自分の物語を知り、そして語ること自体が自己治癒の行為であり、この世での再生の基盤をつくる。荒神社宮司のお話は、「物語と鎮魂」という強く確かな魂の働き的一端を我々に提示してくれた。心理療法に携わる者としても、魂の震える邂逅であった。

「鎮魂と再生への祈りの旅を終えて」 三宅 理子 (一般)

この夏、初めて東京自由大学の夏合宿に参加した。被災地を巡る鎮魂と祈りの旅だった。合宿を終えて、今考えているのは「祈り」とは何かということである。祈りとは、誰が誰のためになんのために行うものなのか……。祈りの旅に参加しながら、祈ることについてあまり考えてこなかったことに改めて気付かされた。今回訪れた被災地では「どこから来られたの?」と尋ねられ、「遠くからありがとうね」と声をかけられることが何度かあった。「私たちのことを忘れないでほしい」と言う被災者も多いと聞く。震災のことをずっと心に留め、そこで痛みや苦しみを受けた人たちのことをずっと思い続けること、心のエネルギーを他者に向けて注ぎ続けること、それが祈りなのだろう。

しかし、それに加えて今回の旅で強く感じたのは、祈りは他者のためだけに行うものではないのではないかということである。

今回の祈りの旅には、さまざまな問題意識をもったメンバーが集まっており、それぞれが自分のやり方で震災に関わっておられた。鎌田先生は2日目の夜の参加者全員の自己紹介をかねたミーティングの終わりに「これこそが鎮魂と祈

りだと思う」とおっしゃった。

おそらく私たちは、自分自身のために祈るのだろう。被災した方や被災した土地のための祈りは実は自分のための祈りでもあり、祈ることによって、私と他者が、私と世界が繋がるような気がした。自分がこの世界と繋がり続けるために私は祈るのではないか、そのように考えるようになった。

この旅で出会ったメンバーは、それぞれが自分のやり方で祈りを捧げておられた。舞う人、横笛を吹く人、尺八を吹く人、お経を唱える人、そして法螺貝を吹く鎌田先生。この世界との関わり方の違いによって、祈りも違ってくるように思えた。私はどのように世界に関わっているのか、これからどのように関わっていくのか、どのように祈るのか。そんな大きな課題を自覚させられた旅だった。

「心に深く刻まれた東北への旅」 樫村 武子 (理事・会員)

2011年3月11日14時40分、東日本を襲ったマグニチュード9の大地震。それに続く火災、史上例を見ない10mを越す大津波。

人々を、人々の営みを、住いを、町々を破壊しつくした大災害。その痕跡を1年半経った今もクッキリと残す、名取市閑上地区、女川、石巻、気仙沼、陸前高田、岩手県大槌町……。その地域の文化の中心にある寺社での神職や住職の方々の、そして雄勝法印神楽を伝承している方々の得難いお話。そして今も被災者住宅で暮らす方々とのひざをつき合せての交流。かつては美しい海沿いの松原であったろう場所にたった1本残った奇跡の松。人々の声も姿もなく、住居跡の土台のみが残る一帯……

深く心に刻みつけられた3日間であった。そして最後の日は、遠野物語の遠野、宮沢賢治記念館でのお話と見学。それまでの3日間、重く沈んだ心が癒される思いだった。ご自身何度も足を運び、前もって貴重な資料を用意して下さった鎌田先生、4日間を巧みに配分して下さった担当の鳥飼さん、岡野さんのお二人に心から御礼を申し上げます。

「不確かで淋しい」

永浜 郁子 (会員)

わたしは忘れないだろう。その衝撃を。南三陸町の一湾を見下ろしながらバスは走っていた。クレーン車が二台動いている。ふと視線を山の方に向けた。なだらかなスロープの山肌に違和感を覚える。むきだしのコンクリートが張り付いている。家々の土台であった。きれいに幾百も、上から下へ海に向かって並んでいる。一つの町の消滅の跡地であった。空も雲もいやに美しい。一昨夜お世話になった亀山旅館と雄勝町大須の入江の風景が重なってくる。漁港に向って家並が下降してゆく風景が。そうだ、一瞬にしてあの風景が、このように壊れてしまう。それが巨大津波なのだと分かった。それは途方もなく畏しいことだ。しかし、しかし、行政がストップをかけても人々は戻ってくるにちがいないとなぜか思った。幾時代も災害を記憶しながら、海から離れようとしない人々、その人々が見えてくるような気がした。幸あれと。

地球の中はどうなっているのか。地震活動期、火山活動期に入っているという。海水の温度が上昇していて気象の変化が著しく進んでいるという。私達の国土は、原発事故もあってズタズタの状態にある。それでも、私達は、流浪しながらでも、小さな蟻ともなって唯、生きて死んでゆくしかない。政治生命というのなら、その生命とは国民ひとりひとりの生命であり政治の旗印であろう、被災地と被災者へ「国がなんとかしてくれる」という希望を与えてやれないのか。わたしは、いつになく荒々しい気持ちに包まれて帰路に着いていた。(遠野)も<賢治>も<仮設住宅>も<なにもかも>不確かで淋しすぎた。

1日目 8/24 (金)

名取市閑上地区富主姫神社・閑上湊神社参拝、(東北大学大学院・鈴木岩弓教授<宗教民俗学>、「心の相談室」事務局長、が終日同行してくださる)。同地供養塔にて鎮魂の祈り→浪分神社参拝・荒浜供養塔にて鎮魂の祈り→塩釜市・塩竈神社・志波彦神社(延喜式内社)参拝。大瀧博司彌宜のお話を伺う→石巻市北上町・釣石神社参拝・鎮魂の祈り、岸波均宮司のお話を伺う→石巻市雄勝町・葉山神社参拝・鎮魂の祈り、千葉修司宮司のお話を伺う→石巻市雄勝町大須「亀山旅館」泊。夜、雄勝法印神楽衆と交流、伊藤博夫(雄勝法印神楽保存会会長)他3名の神楽衆(阿部さん方)のお話を伺い、交流する。鈴木岩弓教授、千葉修司宮司もご一緒にいたく。



閑上地区供養塔



石巻市釣石神社



葉山神社 千葉修司宮司



雄勝法印神楽の演奏

2日目 8/25 (土)

早朝朝食前に有志のみ、葉山神社の奥宮の石(いその)神社(延喜式内社)参拝→気仙沼市陸前階上(はしかみ)陸中国立公園岩井崎・伊勢浜見学→琴平神社参拝→地福寺(臨済宗妙心寺派)参拝、鎮魂の祈り・片山秀光住職のお話を伺う→「サンマリン気仙沼ホテル銀洋」「森づくりにかける志 宮脇昭氏・畠山重篤氏 同時講演会」聴講：森は海の恋人運動提唱者・畠山重篤氏、宮脇昭・横浜国立大学名誉教授(志ネットワーク青年塾&海辺の森を作ろう会共催)→気仙沼被災地商店街でフィールドバレー鑑賞→「ホテル望洋」泊



葉山神社の奥宮「石(いその)神社」のご神体、磐座を参拝



気仙沼市陸前階上 陸中国立公園岩井崎



気仙沼市 畠山重篤氏×宮脇昭氏講演会

3日目 8/26 (日)

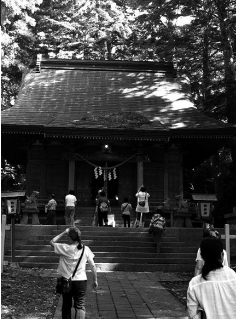
岩手県陸前高田市和田地区：慈恩寺(臨済宗妙心寺派)参拝・鎮魂の祈り・古山敬光住職のお話を伺う→岩手県釜石市 尾崎神社参拝、鎮魂の祈り・佐々木裕基宮司のお話を伺う→岩手県山田町 荒神社参拝・西郷鮎宮司のお話を伺う→弁天島遙拝→岩手県大槌町第9仮設住宅訪問・皆様と交流(歌・氣功実習なども含む)→宮古市「浄土ヶ浜パークホテル」に移動。夕食後、吉田律子氏のお話をうかがい、交流する(吉田律子氏同席)。



尾崎神社 佐々木裕基宮司



岩手県大槌町第9仮設住宅訪問、交流



岩手県山田町船越、荒神社参拝

4日目 8/27 (月)

サンガ岩手 手づくり工房カフェ訪問(吉田律子氏)→遠野物語研究所所長・高柳敏昭氏からお話を伺う→宮沢賢治記念館→新花巻駅で自由解散



サンガ岩手 手づくり工房カフェにて